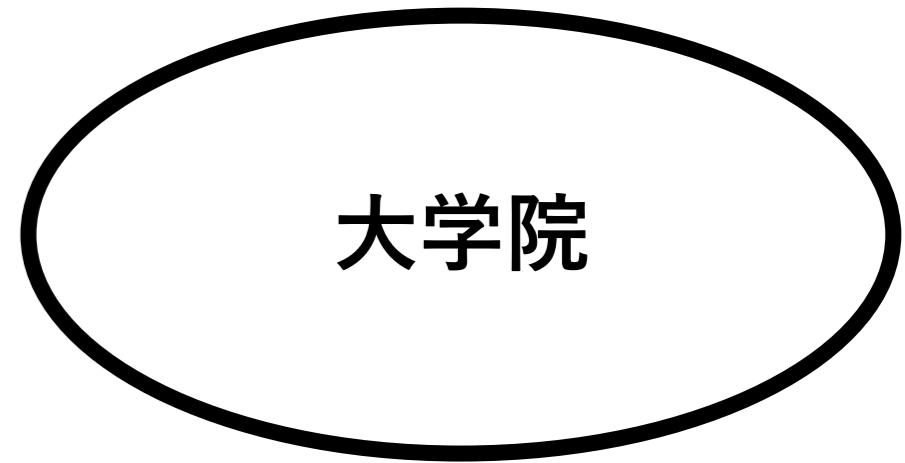


平成30(2018)年度



東洋大学 自己点検・評価(専攻フォーム)



研究科長もしくは専攻長
教務委員
キャリア委員
入試委員
教員資格審査委員
国際化推進委員

部門名 : 生命科学研究科 生命科学専攻

(1)理念・目的

評価項目	評価の視点	判断基準および判断のポイント	根拠資料名	現状説明	評価	改善方策	改善時期
1) 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。	○研究科又は専攻ごとに設定する人材育成その他の教育研究上の目的の設定とその内容 ○大学の理念・目的と研究科の目的の関連性	※1 研究科、専攻ごとに、人材養成に関する目的その他教育研究上の目的を、学則またはこれに準ずる規程等に定めているか。	・「研究科規程」	各専攻、課程において、「教育研究上の目的」を、各研究科の研究科規程に適切に定めている。			
		2 研究科、専攻の目的は、高等教育機関として大学が追求すべき目的(教育基本法、学校教育法参照)と整合しているか。					
		3 研究科、専攻の目的は、建学の精神や大学の理念との関係性や、目指すべき方向性、達成すべき成果などを明らかにしているか。					
		4 研究科、専攻の目的は、これまでの実績や現在の人的・物的・資金的資源からみて、適切なものとなっているか。					
2) 大学の理念・目的及び学部・研究科の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。	○研究科又は専攻ごとに設定する人材育成その他の教育研究上の目的の適切な明示	5 教職員・学生が、研究科、各専攻の目的を、公的な刊行物、ホームページ等によって知りうる状態にしているか。	・「大学院要覧」 ・ホームページ	各専攻・課程において、「教育研究上の目的」を、「大学院要覧」及びホームページにて公表している。			
		6 研究科、専攻の目的の周知方法の有効性について、構成員の意識調査等による定期的な検証や、検証結果を踏まえた改善を行っているか。					
	○教職員、学生、社会に対する刊行物、ウェブサイト等による大学の理念・目的、研究科・専攻の目的等の周知及び公表	7 受験生を含む社会一般が、研究科・専攻の目的を、公的な刊行物、ホームページ等によって知りうる状態にしているか。					
3) 大学の理念・目的、各研究科における目的等を実現していくため、大学として将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定しているか。	○将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策の設定	8 大学の理念・目的を踏まえ、各専攻における目的等を実現していくため、将来を見据えた中・長期の計画その他の諸施策を設定しているか。	・大学院中長期計画書 ・その他()	平成29年度より全学的な方針の下、各専攻の中長期計画を策定し、平成35年度までの到達目標とその計画を明確に定めている。また、学長施策である「教育活動改革支援予算」により、理念目的の実現に向けた教育プログラムの企画と実行を進めている。			
		9 研究科・専攻の中・長期計画その他の諸施策の計画は適切に実行されているか。実行責任体制及び検証プロセスを明確にし、適切に機能しているか。また、理念・目的等の実現に繋がっているか。	大学院中長期計画書	研究科・専攻の中・長期計画である「北関東地域におけるバイオ研究拠点化」「大学院博士後期課程院生の学部非常勤講師採用」「英語による講義数の拡充」「大学院チューター制度」「就職活動の支援」「国際化の推進」などに関する項目について、研究科長および専攻長を実行責任者として着実に遂行している。これらの取り組みは、生命科学分野の課題を解決することにより社会に貢献し、また、高度な専門性を有する人材を育成するといった研究科の理念・目的の実現に繋がっている。検証プロセスについては、まだ明確にはしていない。	B	検証プロセスを明確に、理念・目的の現実につなげていく。	数年以内
4) 大学・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。	○教育組織としての適切な検証体制の構築	10 研究科・専攻の目的の適切性を、定期的に検証しているか。	研究科委員会議事録	・生命科学研究所生命科学専攻の目的が、「教育環境および研究指導体制の充実」「教育研究活動の継続性や多様性」「時代の要請に伴う変革」などの観点から適切かどうかについて、カリキュラム改訂の際に各ポリシーとともに、定期的に検証することになっている。	S		
		11 理念・目的の適切性を検証するにあたり、責任主体・組織、権限、手続を明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。	研究科委員会議事録	生命科学研究所生命科学専攻の目的の適切性についての取りまとめおよび検証の権限は研究科長と専攻長にある。最終的に研究科委員会の決議を経て決定している。	A		

※1.当該項目については、平成23～25年度の自己点検・評価及び平成26年度の認証評価の結果から、大学全体及び各学部・学科の現状には大きな問題がないことと、第3期認証評価の評価項目を踏まえ、点検評価項目の見直しを図ったが、この項目における影響はないと判断し、毎年の自己点検・評価は実施しないこととする。(平成29年9月14日、自己点検・評価活動推進委員会承認)。

(4)教育課程・学習成果

評価項目	評価の視点	判断基準および判断のポイント	根拠資料名	現状説明	評定	改善方針	改善時期
1) 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。	○課程修了にあたって、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果を明示した学位授与方針の適切な設定及び公表	12 教育目標を明示しているか。	・「研究科規程」	各研究科・専攻において、「教育研究上の目的」を研究科規程に適切に定めている。	※1と同様		
		13 ディプロマ・ポリシーを設定し、かつ公的な刊行物、ホームページ等によって知りうる状態にしており、かつ、その周知方法が有効であるか。	・「研究科規程」 ・大学院要覧 ・ホームページ	各研究科・専攻において、ディプロマ・ポリシーを定め、ホームページにて公表している。			
		14 教育目標とディプロマ・ポリシーは整合しているか。	・東洋大学大学院生命科学研究科規程 ・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p.116, 117 ・http://www.toyo.ac.jp/site/gpsc/gpsc-purpose.html ・http://www.toyo.ac.jp/site/gpsc/gpsc-policy.html	生命科学専攻では、生命現象を理解し、その知識をさらに深化させる探求能力を持ち、さらに、地球社会に貢献することの出来る人材を育てることを目標としている。博士前期課程におけるディプロマ・ポリシーでは、これらの能力を習得した者に対して修士号を授与すると謳っており、また、博士後期課程のディプロマ・ポリシーでは、これらの資質に併せ、国際的な視野を持ち、自立した研究者としての研究能力を有する者に対して博士号を授与すると明記しており、教育目標とディプロマ・ポリシーは整合している。	A		
		15 ディプロマ・ポリシーには、学生が修得することが求められる知識、技能、態度等、当該学位にふさわしい学習成果が明示されているか。	・東洋大学大学院生命科学研究科規程 ・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p.116, 117 ・http://www.toyo.ac.jp/site/gpsc/gpsc-policy.html	修士号(生命科学)、博士号(生命科学)を授与されるにあたって、習得すべき技能、知識、態度および当該学位に相応しい学習成果等がディプロマ・ポリシーに明示されている。ただし、当該学問分野においては知識及び技能は不可分なものであるため、それぞれを個別に記載する、という書式を取ってはいない。	A		
2) 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。	○下記内容を備えた教育課程の編成・実施方針の設定及び公表 ・教育課程の体系、教育内容 ・教育課程を構成する授業科目区分、授業形態等 ○教育課程の編成・実施方針と学位授与・方針との適切な連関性	16 カリキュラム・ポリシーを設定し、かつ公的な刊行物、ホームページ等によって知りうる状態にしており、かつ、その周知方法が有効であるか。	・「研究科規程」 ・大学院要覧 ・ホームページ	各研究科・専攻において、カリキュラム・ポリシーを定め、ホームページにて公表している。	※1と同様		
		17 カリキュラム・ポリシーには、教育課程の体系的な教育内容、科目区分、授業形態等を明示し、専攻のカリキュラムを編成するうえで重要かつ具体的な方針が示されているか。	・東洋大学大学院生命科学研究科規程 ・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p.117 ・http://www.toyo.ac.jp/site/gpsc/gpsc-policy.html	「教育課程の編成/教育内容・方法」で、基盤教育科目・専門科目・研究指導がそれぞれどのような教育方針に基づいて編成実施されているかを、体系的に説明している。授業形態や教育内容の詳細については、各科目のシラバスに明示されている。なお、各科目の必修/選択の区別はシラバスには示されているが、カリキュラム・ポリシー内には明示されていない。(基盤教育科目:選択必修、専門科目:選択、研究指導:必修)			
		18 カリキュラム・ポリシーは、教育目標やディプロマ・ポリシーと整合しているか。	・東洋大学大学院生命科学研究科規程 ・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p.116, 117 ・http://www.toyo.ac.jp/site/gpsc/gpsc-purpose.html ・http://www.toyo.ac.jp/site/gpsc/gpsc-policy.html	生命科学専攻の教育目標は、生命現象を理解し、その知識を基に地球社会に貢献することの出来る人材を育てることであり、その資質・能力を有している者に対して修士号を、また、より国際的に幅広い視野を持ち、研究活動を自立的に行うことの出来る者に対して博士号を授与することをディプロマ・ポリシーに謳っている。カリキュラム・ポリシーでは、これを達成するために必要となる教育課程・教育内容・方法および学習成果の評価方法について明記している。博士前期課程では、コースワーク(基盤教育科目および専門科目)、およびリサーチワーク(研究指導)によって、どのような能力・資質を修得させようとしているかが示されており、また、博士後期課程においては、コースワーク・リサーチワークを融合させた形で生命科学研究者としての素養を修得するための教育を行うことを明示している。また、両課程における学習成果の評価方法についても、それぞれ明示しており、教育目標およびディプロマ・ポリシーとの齟齬はない。	A		
3) 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	○各研究科において適切に教育課程を編成するための措置 ・教育課程の編成・実施方針と教育課程の整合性 ・教育課程の編成にあたっての順次性及び体系的な配慮 ・単位制度の趣旨に沿った単位の設定 ・個々の授業科目の内容及び方法 ・授業科目の位置づけ(必修、選択等) ・各学位課程にふさわしい教育内容の設定 <修士課程、博士課程>コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせた教育への配慮等	19 教育課程は、あらかじめ学生に提示してある研究科・専攻の研究指導計画を考慮して、コースワークとリサーチワークを適切に組み合わせるほか、授業科目の順次性に配慮して、バランスよく各年次に体系的に配置されているか。	・生命科学研究科研究計画概要及び専攻別教育課程表 ・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p.123~130 ・2018年度 大学院生命科学研究科博士前期課程授業時間割 ・2018年度 大学院生命科学研究科博士後期課程授業時間割	学位取得のための必修科目(博士前期課程:特別研究および特別論議、博士後期課程:特殊研究)、および博士前期課程における選択必修科目(英語プレゼンテーション演習、科学英語ライティング、科学コミュニケーション特論、科学コミュニケーション演習)は、毎年開講している。博士前期課程対象のその他の講義(特論)については、各科目の専門性・独立性が高いことから(科目ナンバリング参照)、全科目を2年に一度の隔年開講としている。2018年度は、全科目の約半分に相当する15科目の特論を開講している。この開講数は、博士前期課程を短期修了するために必要な科目数を確保している。研究指導(特別講義、特別研究、特殊研究)に関しても、教育課程表にその位置づけが明示され、時間割にも各科目の開講時間が明示されている。各授業科目の単位数及び時間数は、大学院設置基準及び大学院学則に則り適切に設定されている。また、科目編成に関しても、大学院生命科学研究科の教育目標を達成することができるようバランスよく編成されている。	A		
		20 各授業科目の単位数及び時間数は、大学院設置基準及び大学院学則に則り適切に設定されているか。					
		21 カリキュラム・ポリシーに則り、専門分野の特性に応じた教育内容を提供し、学生に期待する学習成果の修得に繋げているか。					
		22 研究科・専攻の人材養成の目的に即した、社会的及び職業的自立を図るための、キャリア教育等必要な教育及び支援を行っているか。また、教育目標に照らした諸資格の取得、その他必要な知識・技能を測る試験の受験に係る指導や支援環境が整っているか(対応する資格等がある場合)。	生命科学研究科生命科学専攻教育課程表 ・2018年度 大学院要覧 p124-p125(生命科学研究科博士前期課程) ・2018年度 大学院要覧 p126(生命科学研究科博士後期課程) ・https://g-sys.toyo.ac.jp/syllabus/teacher/ および各科目シラバス	各科目は、それぞれの分野における最先端の知識を教授できるよう設定されている。	A		
23 ○学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成する教育の適切な実施	・2018年度 大学院要覧 p117-p118(生命科学研究科規定 別表第2 学位授与、教育課程編成・実施及び入学者の受け入れに関する方針) ・http://www.toyo.ac.jp/site/gpsc/gpsc-policy.html ・キャリア委員会資料 ・研究科委員会資料、研究科委員会議事録	研究科規定に示されたカリキュラム・ポリシーに従い、学生が十分な学習成果を修得することができるような教育課程編成となっている。1~2か月に1回開催される『キャリア委員会』(キャリア委員の教員とキャリア担当職員が出席する会議)で各種の情報を共有をしている。このキャリア委員会の決定事項は、適宜研究科委員会で報告して全教員に周知し、学生の支援に役立っている。	A				

(4) 教育課程・学習成果

★ 平成26年度 認証評価において指摘(努力課題)とされた事項

評価項目	評価の視点	判断基準および判断のポイント	根拠資料名	現状説明	評価	改善方針	改善時期
4) 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	<p>○研究科において授業内外の学生の学習を活性化し効果的に教育を行うための措置</p> <p>・各学位課程の特性に応じた単位の実質化を図るための措置</p> <p>・シラバスの内容(授業の目的、到達目標、学習成果の指標、授業内容及び方法、授業計画、授業準備のための指示、成績評価方法及び基準等の明示)及び実施(授業内容とシラバスとの整合性の確保等)</p> <p>・学生の主体的参加を促す授業形態、授業内容及び授業方法</p> <p><修士課程、博士課程></p> <p>・研究指導計画(研究指導の内容及び方法、年間スケジュール)の明示とそれに基づく研究指導の実施</p>	24 シラバスに、講義の目的・内容、到達目標(学習成果)、講義スケジュール(各回の授業内容)を、具体的に記載しているか。	<p>・シラバスの作成依頼</p> <p>・シラバスの点検資料、点検結果報告書</p>	シラバスについては、毎年、学長及び教務部長の連名においてシラバス作成の際の必須事項、留意事項を明示するとともに、各研究科による全科目のシラバス点検を実施し、必須事項の明示や内容の充実に向けて取り組んでいる。	/	※1と同様	
		25 授業内容・授業方法がシラバスに則って行われているか。					
		26 研究指導計画を立案し、学生に予め明示したうえで、その計画に基づき、研究指導、学位論文作成指導を行っているか。★	<p>・研究科委員会議事録</p> <p>・生命科学研究科研究計画概要及び専攻別教育課程表</p> <p>・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p.123～130</p>	各セメスター毎に、研究論文題目ならびに主・副指導教員名を集約し、研究内容の確認を行っている。研究指導計画の立案については、各教員が個々の学生の状況にあわせて実施しているが、研究分野による差異が大きく、また、学生個人の性格等、プライベートな面にも配慮する必要があることから、研究科として集約は行っていない。なお、学位取得のための年間スケジュールについては、大学院要覧およびWebページに明記し、また、メールや掲示板等でも適宜スケジュールの確認・周知徹底を行っている。	A		
		27 学生の主体的な学習を活性化し、教育の質的転換を実現するために、専攻が主体的かつ組織的に取り組んでいるか。	<p>・研究科委員会議事録</p> <p>・生命科学研究科研究計画概要及び専攻別教育課程表</p> <p>・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p.123～130</p>	学生の研究活動を活性化し、期待される学習成果の修得を達成するために、博士前期課程においては2セメスター終了時にポスター形式での中間発表会を課し、主・副指導教員以外の教員や、他の学生との討論による知識の深化に努めている。また、博士後期課程では、2セメスター終了時に博士前期課程と同様ポスター形式の中間発表会を課しているほか、3セメスター終了時に口頭での中間発表会を課している。なお、国際化に対応するために、ポスター発表時のポスターは英語で作成することとしている。	A		
		28 カリキュラム・ポリシーに従い、各科目の学習到達目標に照らした教育方法が適切に用いられているか。					
5) 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	<p>○成績評価及び単位認定を適切に行うための措置</p> <p>・単位制度の趣旨に基づく単位認定</p> <p>・既修得単位の適切な認定</p> <p>・成績評価の客観性、厳格性を担保するための措置</p> <p>・卒業・修了要件の明示</p> <p>○学位授与を適切に行うための措置</p> <p>・学位論文審査がある場合、学位論文審査基準の明示</p> <p>・学位審査及び修了認定の客観性及び厳格性を確保するための措置</p> <p>・学位授与に係る責任体制及び手続の明示</p> <p>・適切な学位授与</p>	29 シラバスの「成績評価の方法・基準」に、複数の方法により評価する場合にはその割合や、成績評価基準を明示しているか。		シラバスについては、毎年、学長及び教務部長の連名においてシラバス作成の際の必須事項、留意事項を明示するとともに、各研究科によるシラバス点検を実施し、必須事項の明示や内容の充実に向けて取り組んでいる。また全学統一の授業評価アンケートにおいて、「シラバスに即した内容の授業が行われていたと思いますか」という設問を用意し、授業内容・方法とシラバスとの整合性を確認している。	/	※1と同様	
		30 他大学の大学院の単位認定を、適切な手続きに従って、合計10単位以下で行っているか。	<p>・東洋大学院学則</p>	大学院学則において10単位まで認定できることを定めており、各研究科委員会で審議の上で単位認定を行っている。	/		
		31 成績評価の客観性、厳格性を担保するための措置を取っているか。	<p>・シラバス点検用チェックリスト</p>	毎年、教務委員を中心としてシラバスの点検を行い、学修到達目標が適切に設定されているか、また、成績評価方法が客観的になっているかについて確認を行っている。	A		
		32 修了要件を明確にし、あらかじめ学生が知りうる状態にしているか。	<p>・大学院要覧</p>	各専攻、課程において、修了要件を「大学院要覧」に明示している。	/	※1と同様	
		33 学位に求める水準を満たす論文であるか否かを審査する基準(学位論文審査基準)を明らかにし、これをあらかじめ学生が知りうる状態にしているか。★	<p>・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p.41, 48</p>	修士学位論文審査基準については根拠資料のp41に、博士學位論文審査基準については根拠資料のp48に、それぞれ明示している。	A		
		34 ディプロマ・ポリシーと修了要件が整合しており、ディプロマ・ポリシーに則って学位授与を行っているか。	<p>・東洋大学大学院生命科学研究科規程</p> <p>・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p.117</p> <p>・生命科学研究科研究計画概要及び専攻別教育課程表</p> <p>・http://www.toyo.ac.jp/site/glsc/glsc-policy.html</p>	ディプロマ・ポリシーと修了要件は整合しており、「研究計画概要」に示された手続きに基づいて、審査・学位授与が行われている。学位論文審査にあたっては、研究科委員会において論文受理についての承認を受け、また、同委員会で承認された「指導教授を中心とした審査委員会」による論文の査読、発表会/公聴会が行われ、それらの内容に基づいた学位授与の審査を研究科委員会において行っている(受理・審査委員会の発足:修士号については1月、博士号については12月の定例研究科委員会。審査:修士号・博士号とも、2月の定例研究科委員会)	A		
		35 学位授与にあたり、明確な責任体制のもと、明文化された手続きに従って、学位を授与しているか。	<p>・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p31-39, 123～130</p>				

(4) 教育課程・学習成果

評価項目	評価の視点	判断基準および判断のポイント	根拠資料名	現状説明	評定	改善方策	改善時期
6) 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	○各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定 ○学習成果を把握及び評価するための方法の開発 《学習成果の測定方法例》 ・アセスメント・テスト ・ルーブリックを活用した測定 ・学習成果の測定を目的とした学生調査 ・修了生、就職先への意見聴取	36 専攻として、各学位課程の分野の特性に応じた学習成果を測るための評価指標(評価方法)を開発・運用し、教育内容・方法等の改善に努めているか。	・研究科委員会議事録 ・東洋大学大学院要覧2018(板倉キャンパス)p.123～126 ・生命科学研究所研究計画概要及び専攻別教育課程表	学習成果の評価については、博士前期課程においては、2セメスタ終了後に実施される中間報告会を、博士後期課程においては、2セメスタおよび3セメスタ終了後に実施される中間発表会をあてている。卒業時アンケートの結果は、生命科学部と合同で実施し、その結果を研究科委員会で報告・内容検討を行い、必要に応じ、関係部署を含めて対応について検討している。学生の自己評価、教育効果、就職先の評価等については実施していない。	A		
		37 学生の自己評価や、研究科、専攻の教育効果や就職先の評価、修了時アンケートなどを実施し、かつ活用しているか。					
7) 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	○適切な根拠(資料、情報)に基づく点検・評価 ・学習成果の測定結果の適切な活用(→前項でまとめて確認) ○点検・評価結果に基づく改善・向上	38 カリキュラム(教育課程・教育方法)の適切性を検証するために、定期的に点検・評価を実施しているか。また、具体的に何に基づき(資料、情報などの根拠)点検・評価、改善を行っているか。	・研究科委員会議事録	カリキュラムの適切性の検証については、例年10月前後の研究科委員会で点検し、その結果を次年度のカリキュラムの修正、時間割等の作成に活用しているが、検証を実施するための根拠資料等を取り纏めるという活動は行っていない。	B	根拠資料の作成および検証結果の取りまとめ結果を議事録として残す。	2019年度
		39 教育目標、ディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーの適切性を検証するにあたり、責任主体・組織、権限・手続を明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させ、改善に繋げているか。	・研究科委員会議事録	研究科委員長が主体となり、定例の研究科委員会において随時、議論を行うことになっているが、昨年度のカリキュラム改定時に、両ポリシーについて検討を行い、大幅に改正を行ったこともあり、現在は、改正内容が適切であったかどうかを観察している状況である。今後は、原則、カリキュラム改定時にポリシーの見直しを行う事としている。	A	両ポリシーの見直しは、研究科長を責任者とし、専攻長、カリキュラム委員を中心に検討していく。	
		40 授業内容・方法の工夫、改善に向けて、学内(高等教育推進センター)、学外のFDに係る研修会や機関などの取り組みを活用し、組織的かつ積極的に取り組んでいるか。	・学内FD研修会開催(7月23日、2月下旬開催予定) ・日本私立大学連盟の研修会に参加および運営に関与	学生に対する研究倫理教育のためのFD研修会を開催した。ほぼ全ての教員が参加し、研究室に所属する学生に対して、的確な教育を行っている。また、2月下旬には、アクティブラーニングと反転授業について、外部講師を招いて行う予定である。毎年、日本私立大学連盟が行っているFD研修会に参加および運営に関与し、外部機関の情報を収集し、共有している。	B	講習会の開催にとどまるだけでなく、授業のどの部分を改善してゆくかを明確にした上で、開催したり、外部機関を活用することを始める	2019年度以降継続

(5) 学生の受け入れ

★ 平成26年度 認証評価において指摘(努力課題)とされた事項

評価項目	評価の視点	判断基準および判断のポイント	根拠資料名	現状説明	評定	改善方策	改善時期
1) 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。	○学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を踏まえた学生の受け入れ方針の適切な設定及び公表 ○下記内容を踏まえた学生の受け入れ方針の設定 ・入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像 ・入学希望者に求める水準等の判定方法	41 アドミッション・ポリシーを設定しているか。	・ホームページ	各研究科、専攻において、アドミッション・ポリシーを定めている。	A	※1と同様	
		42 アドミッション・ポリシーには、入学前の学習歴、学力水準、能力等の求める学生像、入学希望者に求める水準等の判定方法を示しているか。	・ホームページ ・入試情報サイト	アドミッション・ポリシーは、博士前期課程(①生命現象とその応用を理解するために必要な高度な知識を修得するための基礎知識のある者。②生命科学を探究する目的意識をもち、自ら問題点を見出し解決する能力のある者。③生命倫理を尊重し専攻分野における高度な研究能力を修得するという強い意欲のある者)と博士後期課程(①生命現象とその応用を理解するための高度な知識のある者。②専攻分野における高度な研究能力のある者。③国際的な幅広い視野を修得し、自立して研究活動を推進する意欲のある者)にそれぞれ設定している。その上で、入学希望者の特性に応じた適切な方法(筆記試験、面接、書類選考等)を通じて、求める水準を満たしているかを判定をすることを明記している。詳細な基準や判定方法は、入試情報サイトに入試方式ごとに記載している。			
		43 受験生を含む社会一般が、アドミッション・ポリシーを、公的な刊行物、ホームページ等によって知りうる状態にしているか。	・ホームページ				
2) 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学選抜を公正に実施しているか。	○学生の受け入れ方針に基づく学生募集方法及び入学選抜制度の適切な設定 ○入試委員会等、責任所在を明確にした入学選抜実施のための体制の適切な整備 ○公正な入学選抜の実施 ○入学を希望する者への合理的な配慮に基づく公正な入学選抜の実施	44 アドミッション・ポリシーに従って、入試方式や募集人員、選考方法を設定しているか。	・入試システムガイド ・大学院入試要項(東洋大学入試情報サイト)	アドミッション・ポリシーに従って、一般入試や推薦入試等を行っており、入試要項に募集人員(博士課程前期20名、後期課程4名)としている。選考方法については、各入試方式ごとに定めており、受験生にも明示されている。	A		
		45 受験生に、入試方式別に、募集人員、選考方法を明示しているか。					
		46 一般入試、推薦入試等、各入試方式の趣旨に適した学生募集や、試験科目や選考方法の設定をしているか。					
		47 学生募集、入学選抜を適切に行うために必要な体制を整備しているか。また責任所在を明確にしているか。					
48 入学選抜を行ううえで、障がいのある受験生に対し、障がいのない学生と公正に判定するための機会を提供しているか。			合否判定に関しては、障がいや理由に不合格にすることも、またその逆をすることもない。ただし、障害のある受験生が受験した実績がほとんどない。	B	障がいのある受験生に対し、障がいのない学生と公正に判定するための機会を提供することをホームページ上で明記することを検討する。できれば全学的に統一した表記が望ましいと考えられる。	平成31年度	
3) 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。	○入学定員及び収容定員の適切な設定と在籍学生数の管理 <修士課程、博士課程> ・収容定員に対する在籍学生数比率	49 研究科における収容定員に対する在籍学生数比率が、博士前期(修士)課程で0.50~2.00、博士後期(博士)課程で0.33~2.00の範囲となっているか。★	平成30年度東洋大学大学院在籍学生数	・生命科学研究所生命科学専攻の収容定員に対する在籍学生比率は博士前期課程0.50~2.00、博士後期課程0.33~2.00の範囲内である(前期1.35、後期0.33)。 ・博士前期課程については、問題となるような超過/未充足は発生していない。博士後期課程については、恒常的に未充足であるものの、一定の在籍者を確保できていると理解している。	A		
		50 部局化された大学院研究科(※)における、収容定員に対する在籍学生数比率が、0.90~1.25の範囲となっているか。★ ※学際・融合研究科					
		51 定員超過または未充足について、原因調査と改善方策の立案を行っているか。					
4) 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	○適切な根拠(資料、情報)に基づく点検・評価 ○点検・評価結果に基づく改善・向上	52 入試の結果を振り返り、アドミッション・ポリシーの適切性を検証し、必要に応じて改善(アドミッション・ポリシーの見直し、入試方式の変更、定員管理への反映等)を行っているか。		社会的情勢、在校生の状況等に応じて教務委員会および入試委員会を中心として適宜検討している。	A	ポリシーの見直しは、研究科長を責任者とし、専攻長、入試委員および教務委員を中心に検討していく。	
		53 学生募集および入学選抜の適切性を定期的に検証する組織を常設して、定期的にその適切性と公平性についての検証を行っているか。	生命科学研究所委員会議事録	入試委員会が中心となり学生の受け入れの適正性を検証し、研究科委員会で次年度の入試体制を決定しており、責任体制は明確である。本年度の入試についても、GPA導入による推薦入試の成績基準の変更、グローバル化を受けての一般入試に外部英語試験(TOEIC)の導入、入試日程の変更などを行っており、改善に取り組んでいる。学部の取り組み等とも連携して入試方式の在り方について検討しており、PDCAサイクルは機能している。	S		
		54 学生の受け入れの適切性を検証するにあたり、責任主体・組織、権限、手続を明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させ、改善に繋げているか。					

(6)教員・教員組織

評価項目	評価の視点	判断基準および判断のポイント	根拠資料名	現状説明	評価	改善方針	改善時期	
1) 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	○大学として求める教員像の設定 ・各学位課程における専門分野に関する能力、教育に対する姿勢等 ○各研究科等の教員組織の編制に関する方針(各教員の役割、連携のあり方、教育研究に係る責任所在の明確化等)の適切な明示	55 教員の採用・昇格に関する審査基準を明確にしているか。	・「大学院教員資格審査規程」	全学の「大学院教員資格審査規程」を定めるとともに、各研究科で、内規等を定めて基準を明確にしている。	/	※1と同様		
		56 組織的な教育を実施するために、教員間の連携体制が取られているか。	・なし	研究科内に各種委員会を設置して、組織的な連携体制と、責任の所在を明確にしている。				
		57 研究科・専攻の目的を実現するために、教員組織の編制方針を明確にしているか。	・研究科委員会議事録 ・委員会名簿	・教員組織の編成方針は、研究科として定めていないが、生命科学研究科委員会で折にふれ議論している。 ・契約制外国人教員、任期制教員、非常勤講師などに関する方針については明確にしていけない。 ・委員会組織等については、毎年、研究科委員会において決定し、構成員に周知されている。	C	教員組織の編制方針を策定する必要があるため、2019年2月研究科委員会にて方針を立てるための審議を始めた。現在ある下案を基に2019年度中に策定する。	2019年度	
		58 研究科・専攻の個性、特色を発揮するために、契約制外国人教員、任期制教員、非常勤講師などに関する方針を明確にしているか。						
		59 各教員の役割、教員間の連携のあり方、教育研究に係る責任所在について、規程や方針等で明確にされているか。						
2) 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	○大学全体及び研究科等ごとの専任教員数 ○適切な教員組織編制のための措置 ・教育上主要と認められる授業科目における専任教員(教授、准教授又は助教)の適正な配置 ・研究科担当教員の資格の明確化と適正な配置 ・各学位課程の目的に即した教員配置(国際性、男女比等も含む) ・教員の授業担当負担への適切な配慮 ・バランスのとれた年齢構成に配慮した教員配置	60 大学院設置基準に定められている研究指導教員および研究指導補助教員数を充足しているか。	/	・研究指導教員(博士前期課程)必要数4名→教員数27名 (博士後期課程)必要数4名→教員数26名 ・研究指導補助教員(博士前期課程)研究指導教員と併せて7名以上→教員数27名 (博士後期課程)研究指導教員と併せて7名以上→教員数26名と、大学院設置基準を充足している。 ・研究指導教員の2/3は教授となっている。 ・年齢構成は、～30(0名)、31～40(0名)、41～50(10名)、51～60(12名)、61歳以上(5名)となっている。	A			
		61 研究指導教員の2/3は教授となっているか。						
		62 研究科・専攻として、～30、31～40、41～50、51～60、61歳以上の各年代の比率が、著しく偏っていないか。						
		63 教員組織の編成方針に則って教員組織が編制されているか。		・教員組織の編成方針を定めていないため、現段階では点検・評価ができない。	C	教員組織の編制方針を策定する必要があるため、2019年2月研究科委員会にて方針を立てるための審議を始めた。現在ある下案を基に2019年度中に策定する。	2019年度	
		64 専任・非常勤を問わず、教員の科目担当について、教育研究業績に基づいて担当の可否を判断しているか。	・なし	専任・非常勤を問わず、資格審査委員会及び教授会の審議の際には、担当予定科目を明示した上で担当予定科目に関連する経歴、研究業績を基に審査することを前提としている。	/	※1と同様		
		65 研究科の科目担当及び研究指導担当の資格が明確化されているか。	・「大学院教員資格審査規程」	全学の「大学院教員資格審査規程」を定めるとともに、各研究科で、内規等を定めて基準を明確にしている。				
3) 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	○教員の職位(教授、准教授、助教等)ごとの募集、採用、昇任等に関する基準及び手続の設定と規程の整備 ○規程に沿った教員の募集、採用、昇任等の実施	66 教員の募集・採用・昇格に関する手続きを明確にしているか。	/	原則は基礎となる学部所属となるため、採用・昇格に関しては、研究科独自では実施していない。	/	※1と同様		
		67 教員の募集・採用・昇格に際し、規程等に定めたルールが適切に守られているか。						・なし
4) ファカルティ・ディベロップメント(FD)活動を組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上及び教員組織の改善・向上に繋がっているか。	○ファカルティ・ディベロップメント(FD)活動の組織的な実施 ○教員の教育活動、研究活動、社会活動等の評価とその結果の活用	68 研究、社会貢献、管理業務に関して、教員の資質向上に向けた取り組みをしているか。	・新任教員事前研修資料 ・学外FD関連研修会案内 ・海外・国内特別研究員規程、件教 ・教員活動評価資料	高等教育推進センター主催による新任教員に対する研修会の実施や、専任教員の学外研修会への参加支援、また海外・国内の特別研究制度により、教員の資質の向上を図るとともに、平成28年度より「教員活動評価」制度を導入し、教員の教育・研究活動を中心とした自己点検・評価を実施している。	/	※1と同様		
		69 教員の教育研究活動等の評価を、教育、研究、社会貢献、管理業務などの多様性を踏まえて実施しているか。						
		70 教員活動評価等、教員の教育・研究・社会貢献活動の検証結果を有効に活用し、教員組織の活性化に繋がっているか。	・教員活動評価資料 ・HP作製と更新 ・キャンパスでのシンポジウムなどの開催	平成30年度の教員活動評価の実施結果(平均値等)が教員に公表されているが、その結果を有効に活用し、教員組織の活性化に繋げるような組織的試みはなされていない。一方、各教員によるHPの作製および更新により、研究結果について公表を行っている。さらに、キャンパスにおいて、板倉シンポジウムなど開催し、前年度、サバティカルに行った教員の報告会も実施している。部分的に条件を満たしていないところがあるが、PDCAサイクルは回り始めている。				A
5) 教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	○適切な根拠(資料、情報)に基づく点検・評価 ○点検・評価結果に基づく改善・向上に向けた取り組みを行っているか。	71 教員組織の適切性を検証するにあたり、責任主体・組織、権限、手続を明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させ、改善に繋がっているか。	・研究科委員会議事録	教員組織の適切性を検証するにあたり、責任主体は研究科長、責任組織は研究科委員会である。しかし、これら責任体制や権限、手続については明確にされておらず、定期的な検証は行われていない。	C	大学院教員に関しては新規に常勤の教員を採用する権限がない。このため、教員組織の編制方針を策定して、大学院で独自に検証するため、責任の主体を研究科長とした(2019年3月研究会委員会)。ここで学部教員採用に際して連携を図るための仕組み作りについて話し合った。2019年度内に責任主体・組織、権限、手続を明確にする予定である。	2019年度	

(11)その他

評価項目	評価の視点	判断基準および判断のポイント	根拠資料名	現状説明	評価	改善方策	改善時期
1) 大学が推進している3つの柱を基盤とした教育・研究活動を行っているか。	哲学教育	72 教育・研究活動の中で哲学教育を推進しているか。	各開講科目のシラバス	生命科学研究科では、生命活動を中心とした自然科学について教育・研究活動を行うことを目的としているため、いわゆる人文科学に分類される「哲学」教育は実施していない。しかし、対象を細分化して検討・認識した上でこれを統一的に把握し、これを体系づける能力、論理構成能力などについては、開講されている各科目においてそれぞれ教育を推進している。	A		
	国際化	73 教育・研究活動の中で国際化を推進しているか。	・シラバス ・ホームページ ・東洋大学研究発表奨励金規定、件数	基盤教育科目で「英語プレゼンテーション演習」や「科学英語ライティング」を開講し、海外の研究者と交流し、共同研究を推進する実践能力を身につけさせる教育を行っている他、英語による専門講義科目を開講してABEイニシアチブや国費留学生を受け入れている。また、研究室での研究活動において最先端の国際的な学術課題に取り組んでおり、大学院研究発表奨励金により、学生の国際学会や国際誌における研究発表を支援している。	S	国際学会や国際誌における研究発表は、継続的に支援・指導していく必要がある。また、ABEイニシアチブや国費留学生等の留学生を今後も継続的に獲得していく必要がある。	2019年度
	キャリア教育	74 教育・研究活動の中でキャリア教育を推進しているか。	・教員活動評価資料	平成30年度の実施結果(平均値等)が教員に公表されているが、その結果を有効に活用し、教員組織の活性化に繋げるような組織的試みはなされていない。	B	教員活動評価等の検証結果を活用し、教員組織の活性化に繋げる方策を議論する必要があるが、全学システムであるため一研究科では決められない。	
2) 研究科・専攻独自の評価項目①	(独自に設定してください)	75 (独自に設定してください)					
3) 研究科・専攻独自の評価項目②	(独自に設定してください)	76 (独自に設定してください)					
4) 研究科・専攻独自の評価項目③	(独自に設定してください)	77 (独自に設定してください)					